

食品中に残留する農薬等有害物質の 規制と試験法の現状と課題

オーガナイザー

堤智昭(国立衛研)
田口貴章(国立衛研)

食品の安全・安心を確保するため、農薬、動物用医薬品、マイコトキシン等の有害物質には、許容される残留基準値等が設けられている。食品から基準値を超過する有害物質が検出された場合、食品衛生法に従いその食品の流通が禁止されることから、基準値への適合性を適切に判定する試験法が必要不可欠である。食品に含まれる有害物質等の試験法は、対象の化合物、対象の食品によって様々で、厚生労働省の

管理下、国立医薬品食品衛生研究所を中心として、地方衛生研究所、登録検査機関および大学等と協力して開発されてきた。現在も継続して、最新の分析化学に基づき様々な試験法の開発または更新が進められている。

本シンポジウムでは、食品中に残留する農薬、動物用医薬品、マイコトキシン等を例に、基準値がどのように設定され、試験法がどのように開発されているのかを紹介すると共に、薬学部出身者が食品分野のレギュラトリーサイエンスにも大きく貢献していることを強調したい。

(田口貴章)

難治性疾患の制御に向けた 産学薬学研究者の連携起点

オーガナイザー

津川仁(東海大医)
三宅正晃(大塚製薬)

癌、炎症性腸疾患(IBD)や感染症など難治性疾患の克服は、今なお大きな研究課題として残されている。薬学研究者は、産学の立場にとらわれずこれら難治性疾患の予防・治療法の創出を目指した研究を日夜徹底し、その成果の社会実装に向けて取り組んでい

る。個々の研究成果をいち早く臨床還元し医学の発展につなげるためには、機動力あふれる基礎・臨床研究の実践が不可欠となるがゆえに、産学連携研究の必要性・重要性は極めて高い。

本シンポジウムでは目標を同じくした産学の薬学研究者が、個々の立場で展開中の研究内容とその方向性を突き合わせ議論し、難治性疾患の克服に向けた研究展開と産学連携のあり方について探る。

(津川仁)

胎盤機能に関する基礎・臨床的研究と 創薬研究への展開

オーガナイザー

東阪和馬(阪大高等共創研)
吉江幹浩(東京薬大薬)

胎盤は、胎児への栄養・酸素供給や異物排除などの機能を担うことから、妊娠の成立・維持、胎児の健やかな成長には、胎盤の正常な維持と発達が不可欠である。そのため、胎盤形成不全や胎盤機能異常は、妊娠高血圧症候群や胎児発育不全につながるだけでなく、将来的な疾患リスクになることが示唆されている。しかし、次世代の健

康に影響を及ぼす胎盤機能異常の評価、胎盤形成メカニズムの理解は未だ十分には進んでいない。

本シンポジウムでは、胎児環境の制御に働く胎盤に着目し、その機能・構造形成の理解、胎盤機能不全がもたらす病態の解明や治療戦略の開発に向けた基礎的・臨床的研究に取り組んでいる研究者が、最新の研究成果を紹介する。さらに、胎盤学を通じた今後の創薬研究への展開、ならびに次世代の健康確保・健康増進について論じる機会としたい。

(東阪和馬)

ゲノム編集技術が切り拓く未来医療

一技術開発から治療応用まで

オーガナイザー

塚本智仁(阪大院薬)
松本大亮(広大院医系科学)

CRISPR-Cas9システムによる遺伝子治療は、従来の遺伝子補充療法とは異なり、任意の遺伝子領域を直接正常な遺伝子に修復することから、恒久的な治療効果を示す。このことから、ゲノム編集による遺伝子治療は、先天性遺伝子疾患に対する革新的な治療法として注目を集めている。一方、ゲノム編集による遺伝子治療の実現に向けては、ゲノム編集効率、Cas9の制御方法、

標的組織への送達法、特許の問題など、解決すべき様々な課題が残されている。

本シンポジウムでは、ゲノム編集治療の様々な課題を解決するため研究を取り組んでおられる5人の研究者に、基礎的なゲノム編集技術開発から治療応用を見据えた研究まで、最新の知見を幅広くご講演いただき。本シンポジウムによって、ゲノム編集治療の現状と今後解決すべき課題について議論することで、未来医療の実現に向けた新たなゲノム編集研究につなげることを目指す。

(塚本智仁)

第19回若手が拓く新しい薬剤学

一 一味違った創薬モダリティで未来を切り拓く

オーガナイザー

東大志(熊本大院薬)
奥田知将(名城大薬)

わが国はこれまで、電化製品やカルチャーなど、独自のイノベーションを切り拓き、多くの発明品を世に出してきた。医薬分野においても、ブロックバスターにつながるような革新的な基

礎研究の成果を次々に生み出し、ノーベル賞受賞者も多く輩出してきた。しかし、現在のわが国は学術論文の量・質共に大きく順位を下げてしまい、元気をなくしている。今こそ医薬分野における独自のイノベーションを起こし、明るい未来を創り上げる準備をする必要がある。

本シンポジウムでは、一味違った切

り口で、新しい創薬モダリティの開発に従事されている5人の研究者にご講演いただき、新奇の医薬品を開発するためのマインドや戦略、研究内容についてご紹介いただき。具体的には、プラスチック、製剤添加物、超分子ならびに腸内細菌を医薬品として有効利用した事例をご紹介いただき、全く新しい視座で未来の創薬モダリティを創出する足がかりを築きたい。本シンポジウムを通じて、明るい未来を創り出すヒントが生まれれば幸いである。

(東大志)

祝 日本薬学会 第144年会

(順不同)



鈴鹿医療科学大学 薬学部

〒513-8670
三重県鈴鹿市南玉垣町三五〇〇一三
電話 〇五九(三四〇)〇五五〇



愛知学院大学 薬学部

〒464-8650
名古屋市中種区楠元町一〇〇
電話 〇五二(七五一)二五六一



岐阜薬科大学

〒501-1196
岐阜県岐阜市大学西一二五〇四
電話 〇五八(二三〇)八一〇〇



新潟薬科大学

〒956-8603
新潟市秋葉区東島二六五一一
電話 〇二五〇(二五)五〇〇番



横浜薬科大学

〒245-0066
神奈川県横浜市戸塚区俣野町六〇一
電話 〇四五(八五九)一三〇〇



明治薬科大学

〒204-8588
東京都清瀬市野塩二一五二二一一
電話 〇四二(四九五)八六一一番(代)



星薬科大学

〒142-8501
品川区荏原二一四一四一
電話 〇三(三七八六)一〇一一(代)



東京薬科大学 薬学部

〒192-0392
東京都八王子市堀之内一四三二一一
電話 〇四二(六七六)五一一一番(代)